或る老僧の話

昭和五十五年六月三十日　発行

非　売　品

著　者　本多顕彰

発行者　本多公世

〒167　杉並区下井草三ノ三三ノ六

電話　東京〇三―三九六―五八九七

印刷所　信毎書籍印刷株式会社

製本所　大製株式会社

© Kinaro Honda 1980年 Printed in Japan

目次

或る老僧の話……三
「歎異抄」の真実……一九
素材と創作
——シェイクスピア史劇における材料の取扱い方——……一四七
あとがき……二〇八

題字　福尾　康文

或る老僧の話

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

大正九年一月「名古屋新聞」

一

私のもとの名は吉田左近といひました、私が大小を投げすてて佛門に入つたのは明治元年の秋でその時私は二十三でした。

どうしてそのうら若い私が日本歴史中で若者が最も氣を吐いたあの頃世からは顧みられない出家に志したか、それを人に語ることは今日まで私には決して出來ませんでした。私の犯した罪は其程大きいものでした。それがすべてを佛に委すことが出來た今日、不思議なことにはこの私の胸に祕められて夢にまでも私を責めた恐ろしい祕密をどうしても人に語らずにはゐられなくなつたのです。何も私の懺悔話で若い皆さんをどうしやうなどとは考へてはゐませんが、もし私の話が少しでも皆さんの御考への足しになるならばそれは私の望外の喜びです。

私は實は人を殺したのです。それぱかりでなく私の不眞面目が最も嚴肅なそして純眞な戀を害しました。私が人を殺したのは勿論戀を得んが爲でした。今から考へるとあの當時は私は戀

の爲に氣狂ひになつてゐました。

戀は天が人間に與へた最も美しいそして純なものです。人はよくこれを口にします。ところが眞面目にさうは考へてゐません。少くとも人々がやつたあとからよく考へてみると、さうとしか思はれません。人は戀を人の力でどうかすることが出來るやうに考へてゐます。今のところそれを何といつて辯解したところでさうでないといふ證據をあげることは出來ますまい。ロでは何と云はうとも、人は自分の力をどこまでも信じどこまでも働かせやうとしてゐます。そしてあの廣大な不可抗な大自然の力をも征伏しうるかの如く高慢にも考へてゐます。

この考へほど危險なものはありますまい。お恥かしいながら私はこの不眞面目な不埒な考への爲、二つの尊い命と、最も神聖な最も眞摯な、そして最も美しい若者の戀を、最も悲慘な運命に突き落してしまつたのです。

私はその當時どこに住んでゐたか、又誰に事へてゐたかは申し上げますまい。たゞある大きな湖のほとりとのみ云つておきます。

事件の起つた頃は既に私には父も母もありませんでした。たゞ一人の叔父がありましたが、それは鳥羽伏見の戰に幕府方に味方して討死しました。私も祖先や叔父の關係上幕府に從はねばならないのでしたが、私は皇軍の爲に刀をとつて戰ひました。それは眞に私が君に忠義であつたからではなくつて實は私の初戀の女の心を得んが爲でした。

女の名を千代といひました。彼女は稀なる美人であるといふ程美しいことはありませんでしたけれど、どこかその表情に人の心を魅するところがありました。

かうして御話してゐる私の目の前に黑水晶のやうな彼女の眼がちら〳〵します。この眼も慥に人の心を醉はせる一つの特徵でした。

彼女に思ひをよせたのは決して私一人ではありませんでした。私の藩の若侍は殆ど皆彼女の心を得んことを願つてゐたに違ひありません。殿樣でさへ、もし口喧しい奧方さへなければと、考へてゐらつしやつた程でしたから。その男どもの中で本當に彼女の心をかち得てゐたのは池上主水助といふ男でした。千代の父と主水助の父とは碁の友達でした。

主水助は（當時私は戀敵の偏見から隨分罵りもしましたが）士として誠に申分のない男で、どんなつまらない事でも眞面目に考へ眞面目にしました。隨つて藩での評判は大したものでして、千代の戀をかち得たのも當然のことでした。

二人の心は最も嚴肅な自然の力によつて永久に離れないやうに固く結びつけられてゐました。ところが人間、ことに若い男の心といふものは妙なもので、女が確かな戀人を心の中に定めたといふことを覺つてもそれを明言しない間は、女から愛を求めることを決してやめないものですね。

主水助の幸福は到る處で羨まれました。彼に嫉妬を感じない若い男はなかつたでせう。しか

し私程彼を惡(にく)んだものは恐らく居なかつたでせう。

二

同僚の若侍が私に向つて

「左近いかがいたした。千代殿よりの返事なりとも拙者たちに見せてはくれぬか」

などとからかふ事があると私はむきになつて怒りました。さうした言葉は彼等お互ひの間にも交はされてゐたことは知つてゐながらも、それがくりかへされる毎に私の主水助に對する嫉妬と怒りはます〳〵強くなつてゆきました。私は千代の家を訪れるのをやめました。私はさうすることによつて主水助の勝利を確に認めることになるのは承知しながらも、愛されることは出來ないといふことを知りつつ訪れるのをこの上ない恥辱と考へました。

ところが或る晩私は、御屋敷の塀の外の暗い通りを私を散々罵倒し反對に主水助を大變に稱揚しながら歩いてゐる二人の若侍に出會しました。彼等は我が戀に敗れたのは當然で、それをまだ諦めないは本當に分知(わけし)らずだとお互ひに話合つてゐました。いつもの私だつたら、きつと刀を拔いて躍りかかつたでせうが、私は妙に手足がすくんで、木蔭にかくれて彼等の通り過ぎるのを待つてゐました。

私はその翌日から御屋敷で人に顔合はすのが恥かしくなりました。しかし、さうしてゐるのは反つて同僚の輕蔑を增すものと考へ、人の中ではいつもよりもずつと快活を裝ひ、擊劍の稽古に熱中しました。

しかし千代のことはどうしても考へずにはゐられませんでした。ただ前のやうにどうかして千代をして自分を愛させやうとは考へなかつたのだが、『千代が何んだ。どこが美しいのか、別段とりたてて云ふ才能もないではないか……』と云ふやうなことをくりかへし考へつづけてゐました。夜、却々眠られない時などには『おれは千代のことを考へて眠れないのぢやない』と自分自らに辯解するのが常でありました。

しかし、千代を忘れやうとするにしろ、千代を罵らうとするにしろ、畢竟それは負惜しみに過ぎなくて根柢においては、矢張り自分は千代を愛してゐて、千代の事以外を考へることが出來ないといふことを認めないわけにはゆかなくなつた時、私の主水助に對する怒りは新しくもえ始め、私はどうしても千代の心を得て、今まで自分を笑つた奴等を二倍にして嘲笑ひ返してやらうと決心しました。

私は、千代の父の木村左衞門尉が私の劍術の上達を他の人に向つて賞めてくれたのを聞いた時、また新しい元氣を振り興しました。私はまた千代の父を訪問し始めました。時には夜半過ぎまで左衞門尉の碁の相手になつてゐたこともあつたりして、終に私は全く彼の御氣に入りに

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

なつてしまひました。私は日々に彼の口から娘のことが云はれるのを待つてゐました。

それに私はいい事を思ひついて心は希望に輝きました。それは千代は木村家の一人娘で、主水助も家督であるといふことなのです。二人の親が、いくら可愛いい子の戀の爲とはいへ、家を犧牲にするやうなことはなからうと思つたからでした。そして私は戀の爲ならば家をつぶしても關はないと思つてゐました。

三

私は左衞門尉が居ない時でも木村の屋敷を訪ねるやうになり、終には居ないのを見はからつて訪ねるやうにしました。そして千代と二人で庭の植込みの間を散歩することが私の魂を有頂天にしました。私はしみ〴〵幸福を感じました。私は左衞門尉に感謝しました。

時には主水助と彼女の家で一緒になることがあつても、私の方がより親しく彼女に話しかけまた彼女も私により親しくしてゐるやうに私には思へました。私は主水助に對して強い優越を感じ彼を時には憐れんでやりました。

ところが……。

私は何といふ、なさけない宣告を聞かなければならなかつたでせう！

常に幸福を感じてゐる人は決して惡い事を思ひたつものではありません。どんなに善人だと思はれてゐる人でも絶望の境におけば自分を害するか又は他人を害しないと保證することがどうして出來ませう。

主水助と千代との結婚が、とり決められた事を突然聞かされた時、私は最も惡いことを思ひたちました。

時しも會津と桑名の兵が京都に向つておしよせて來ました。

私は「この時だ、さうだ、このどさくさまぎれに……」と思ひました。そして絶好の機會を與へてくれたものと信じて天に深く感謝したといふのは何といふ淺果なことだつたでせう。實は天は私に、天地の間で人間が犯す最も重い罪を犯させんが爲にこの機會を與へたにちがひなかつたのです。

千代の父の左衞門尉も主水助もその父の七郎も私も官軍の為に戰ひました。

その戰場で私は左衞門尉と七郎とを暗殺しました。

そして私は七郎が裏切りして賊軍について左衞門尉を殺したから、私が不埒な七郎を斬つて捨てたやうに云ひ觸らしました。人々は皆私の言を信じました。何故ならば七郎の舅が賊軍に味方してゐたといふ事實から推して、七郎がさうするのは有さうなことのやうに誰も考へたからです。

私の謀事は、豫想通り當り、主水助は夜の中にどこかへ逃げかくれてしまひました。

私は父の讐を討つてやつた恩人として、千代の夫となることになりました。式を擧げたのは慶喜公が大坂から船で江戸へ逃げ歸つてからの事でした。

しかし私は決して幸福にはなれませんでした。

戀をかち得んが爲に狂亂してゐた私の頭が追ひ〳〵鎭まり、張りつめた心がゆるむにつれて私は自分の犯した罪の恐ろしさを感じ始めました。臆病な私は夜の暗闇を極端に恐れました。

夜も晝も私を責めるのは七郎と左衞門尉の最期の幻でした。千代の悲歎は女だけに非常なものでした。彼女はそれを私に隱さうと努めました。さうすればする程彼女は窶れて、純な美しさや魅力は日々に彼女の顏から剝がれてゆきました。一月たたぬうちに彼女は昔の面影を殆どとどめてゐない程醜く萎んでしまひました。

今から考へてみると彼女の悲歎は父を失つたといふ以外の、更に大きな原因にもとづいてゐたのでした。その原因といふのは話のすすむに從つて自から明かになりませう。

けれど當時私は彼女が父の爲にのみ悲しんでゐるのだと解釋してゐました。良心に責められて疲れきつてゐた私は一體どうすればよかつたのでせう。私は彼女に愛せられたい爲に、彼女の父を殺しながら、世間は兎も角彼女を欺いてゐたのでした。

けれどもその他私はどうすればよかつたのでせう。私がああしなかつたならば、私は彼女と

主水助の結婚を目の前に見ながらどうすることも出來なかつたに違ひありません。

私の良心の苛責は嚴しく私は彼女を慰めることはできませんでした。もし慰めるとしたら、それは本當の愛からでなくつて僞りの愛からですから。私は私自身が恐ろしくなるとともに彼女を恐ろしく思ふやうになりました。

私のその時當然すべき事は彼女に自分の犯した罪を打ち明けて、もし彼女が許してくれるならばそれ程の犧牲に價した彼女を幸福な感謝にみちた愛で包んでやり、もし彼女が讐討を欲するならば潔く打たれてやるか、それとも、二人がともに死ぬかのうち一つを選ぶべきでした。

私は彼女を疑ひ始めました。

私は出來るだけ彼女を避けるやうにしました。一日中うちに居ることは稀になりました。二人が互ひに笑顔を見せたのは結婚以來唯の一度もありませんでした。

私の神經は日に日に鋭くなつて彼女に顏を合はせるのさへも恐はくなりました。そして終に或る晩彼女が、左衞門尉の殺されたのは七郎の殺されたあとだつたといふやうなことを下郎どもが話すのを聞きましたが、といふやうなことを云つてからは、私は寢床の中でも懷劍を持つてゐて、鼬の走る音にも眼を覺ましました。

或る晩の如きは枕元へ燧石をとりに來た彼女を、「何者だ！」と、どなりつけました。

さういふ有樣で私は安眠を奪はれてしまひました。私は睡眠不足を補ふ爲時々友達の家に泊

りました。さうして歸つて來ても彼女は別段不快な顏も見せませんでした。彼女は或惱みに壓倒されて何物をも感じなくなつてゐたにちがひありません。

私の外泊が三晩にも四晩にもわたることがあつても彼女は一向關(かま)つてゐないやうでした。

とうとう最後の晩が來ました。私は夜おそく歸つて來ました。門はまだ開いたままで玄關も戸がたつてゐませんでした。氣味わるく思つた私は刀を拔いて右手にひつさげて奧に入りました。

四

そこに何があつたと思ひますか？　暗い燈の下に私は何を發見したか？　私はあの時のままの身ぶるひをかうして話す今またそのまま感じます。

そこには……彼女が血にまみれて伏してゐます……白い裝束を着て。そのすぐ前には一人の若侍が同じくなまぐさい血の中に伏してゐます……。

その男が誰であるか、もう御想像がつきませう。主水助なのです。

あの夜始めて逢つて、二人で死ぬ氣になつたのか、或は二人で私の不在の夜逢つてゐたのか、それとも私に隱れて私の家のどこかに、とくに居たのか、それはわかりません。

しかし、二人が最も自然な純な戀の爲に死んだのは明かでした。二人は何等の遺書をのこしておきませんでしたけれど、如何に戀の爲に惱んだかはあなた方にもはつきりわかりませう。二人とも私が眞の讐であるといふことは少しも氣付いてゐないやうでした。もしもさう氣付いたら私を生かしておいて二人で死ぬわけはありません。

千代にとつては主水助は仇敵（かたき）の子であります（事實はさうでなくとも二人は欺かれてさう信じてゐました）。そしてその事が二人をいたく惱ましたに違ひありません。

最も愛する人が仇敵の子だと知つた時、千代の懊惱（なやみ）はどんなでしたでせう。又主水助の惱みはそれ以上であつたに違ひありません。それにも拘らず二人の戀は反つて深められたのです。二人はこの世で相擁（あひいだ）くことの出來ない戀の爲に死を決したのは眞に悲慘でもあり、至當でもあります。何といふ美しさでせう。

それに反して私は何といふ不眞面目なのでしたらう。彼等はかたきと知りつつ愛しあひました。それだのに私はあれ程の大罪を犯してまでも得た彼女を決して愛しませんでした。色々辯解されるでせうが、要は私が不眞面目でしたからです。私は彼女を愛してゐたのではなかつたのでした。私が愛してゐたのは彼女の色香でした。而も私は愛しあつてゐる二つの心を人力で割（さ）くことが出來ると信じたのでした。そこで二人の親を殺して彼女の體を自分のものとしました。しかしそれによつて心までも、かち得やうとしたこと、そのことを指して私が天地の間で

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo